然れども韓國のみにては本邦の要求を容るゝに充分なりと云ふべからず、是に加ふるに滿洲の植民を以てせざれば、未だ大陸に於ける帝國の基礎を强固ならしむるを得ず、然らば滿洲の植民的價値如何、乞ふ少しく述べん。

滿洲の植民的價値

第二節　滿洲の植民的價値

自然的要素

第一項　自然的要素

滿洲は支那の一部分なりと雖、面積の廣大なる優に一大獨立國を建設し得べきなり、其面積の如き確實なる統計無しと雖、黑龍江省約十九萬方哩、吉林省約十一萬方哩、盛京省約六萬方哩、合計三十六萬二千三百十方哩、實に總面積九千四百六十萬町歩にして本邦總面積の一倍に當れり、而して地勢は大陸的にして吉林省は山岳多く盛京省亦起伏ありと雖、黑龍省の如きは大平野に富み嫩江、松花江、遼河等其間を流れて灌漑其他一般の水利に便にして、其地質の如き場所により一定せざるも、或一少部分を除くの外は地味一般に肥沃にして、殊に松花江流域の如き沃野茫々として天に連るを見る、加ふるに氣候一般に寒冷なりと雖、諸種の作物に適し、就中豆類、麥類、黍粟類、蕎麥、麻、藍、煙草、果物、畜産物等の生産は其主要なるものにして、滿洲の富源は凡て是等の生産による、而して是等廣大なる面積の幾割が農耕地に供せられ、又將來幾何の地積が農耕地として利用せられ得べきか、今總面積の五〇「ペルセント」を耕作し得べきものとすれば、可耕地四千七百萬町歩となる、而してホシイの說によれば現耕地は可耕地の五分の一に過ぎずと稱するを以て、現耕地積は約九百四十萬町歩に過ぎず、故に將來に於て尙三千八百萬町歩の農耕地を開發し得べき理にして、これを本邦將來に於ける農耕地增加の歩合に比すれば雲泥の差なりと云ふべし、滿洲の將來は斯の如く農業地として有望なるのみならず、其他礦山、森林の富源に至つても實に見るべきもの多し、故に滿洲の自然的要素は本邦の農業植民地として極めて適切なりと云ふべく、加ふるに其本邦との距離の遠からざる其農産物を運搬する上に於て、甚便利なるは、益〻其價値を大ならしむるに至る。

可耕地面積

人爲的要素

第二項　人爲的要素

人口

滿洲の自然的要素の如此多望なると同時に、その人爲的要素は本邦の植民地として更に其價値を增大するものあり、即滿洲の人口は極めて稀薄にして或論者の如きは七八

農業人口吸收の範圍

百萬に過ぎずと稱するも、ホシイの說に從へば約千七百萬人なりと云ふ、故に一方哩僅かに四十六人餘に過ぎず、而して現耕地九百四十一萬町歩に割當つる時は約一人の耕地五反五畝歩に相當せり、然らば將來に於て滿洲は幾何の人口を吸收し得るかの問題は極めて重要の問題なりとす、殊に農業植民者として幾何の移住者を送り得べきか、之が判斷を下さんと欲せば滿洲に於ける一人の經營面積を定めざるべからず、滿洲の氣候寒冷なると其平野に富むるは粗放農の適するを信ずるが故に、今一人の經營面積を二町歩とする時は二千三百五十萬人を容るゝを得べきを以て、將來尙農耕者として六百五十萬人を容るゝの餘裕を存す、更に北海道の例に從ひ一戶の農耕地を五町歩とすれば一人の耕地約一町歩となるが故に、可耕地面積四千七百萬町歩を耕作するには四千七百萬人を要す、今現住人口千七百萬人を除去すれば、將來三千萬の人口を容れ得べきなり、即滿洲は農業植民地として將來此の如き無數の人口を吸收するの餘裕あり、之に加ふるに其他の商工業者を以てし、一方哩の人口を二百人とすれば、將來尙五千五百萬の人口を容るゝを得べく、更に一方哩の人口を三百人とすれば、尙九千萬の人口を吸收するを得べく、實に前途有望の植民地と云はざるべからず。

農業者一人の經營面積

滿洲は植民地として前途有望なり

政治的關係

其他人種的關係風俗習慣等の關係に於ては、韓國に於ける場合は大差なきを以て茲に論述するの必要を見ず、其政治的關係に至つては韓國に於けるが如き密接の關係無しと雖、既に十年前に於て我帝國が滿洲の一部に手を染めし以來、本邦外交問題の大部分は此滿洲問題に關し、滿洲の處置如何は直ちに韓國の安危に關する所のものなり、茲に於てか滿洲問題のために露國と干戈相見え連戰連勝の結果は遼東の一角に基礎を固め、滿洲との關係益〻多事ならんとするに至る、此の如き重要の關係を有する地方に向つて植民政策を執るは素より當然の事たらずんばあらず、其經濟的關係の如きに至つては是又韓國に對するが如く密接ならずと雖、彼我の關係は逐年密接しつゝあり、今彼我貿易の狀況を見るに發達の蹟歷々たり、而して滿洲より本邦に向け輸入し來る所のものは豆類及豆糟其大部分を占む、今左に支那より本邦に輸入する豆類及豆糟の價格を示さん。

經濟的關係

彼我貿易の景況

類別	卅六年	卅五年	卅四年	卅三年	卅二年
豆類	五、五〇三、一三七円	三、五三四、一三八円	二、八〇八、三三一円	二、一九〇、六四二円	六、六六六、〇九八円
豆糟	七、五三六、九八五	八、〇〇三、二〇二	六、三〇六、〇三八	三、七三八、九四一	——
合計	一三、〇四〇、一二二	一五、五二七、三四〇	九、〇一四、二六七	五、九二九、五八三	——

以上は獨り滿洲のみよりの輸入にあらず、支那全部よりの輸入なりと雖、殆ど凡ては滿洲の生産なるを以て、之を滿洲よりの輸入と見て大差なきを信ず、而して此輸入は日本の農業が肥料を多く用ふるに從ひ益〻增加するものにして、北海道の豆作の如き或はこれが爲に壓倒せらるゝの日無きを保せず、而して明治卅四年解氷期より七月に至る四ヶ月に於て、營口より本邦に出したる豆類は四千二百四十九萬八千九百斤にして全輸出の三分の一を占め、同く豆糟の輸出は二百六十萬枚にして、營口總輸出の約六〇「ペルセント」を占むと云ふ。

本邦より滿洲に向つて輸出する物品は主として綿布綿絲其他の雜貨なれども、茲に確實なる統計を有せざるを恨みとす、卅二年に於て滿洲に輸入したる綿布類の總價格は四千五萬圓に達し、就中日本よりの輸入は僅に六十一萬一千八百二十一圓に過ぎず、又綿絲の如きに至りても近來著しき進歩をなすに至りしも、尙一歩を印度綿に輸するの狀況にあり。

要之、彼我の貿易は現今彼の我に向つて輸出するもの多きを見る、而して彼我の貿易は今後益〻隆盛に赴き、經濟的關係の密接を加ふるに至るべきを以て、此地に向つて

植民政策に伴ふ軍費の節減

植民政策には海軍の後援を要す

植民政策を取るは當然のことと云ふべし。

如此滿韓兩國は其自然的要素に於て、又其人爲的要素に於て、共に農業植民地として善良なる要素を備へ居るを以て、此方面に向て植民發展するに於ては帝國將來の勃興期して待つべきなり、特に滿韓兩國が其距離に於て本邦と相接近するは植民政策施行上に於て多大の便益を與ふるものなり、即植民地の經營は時に急施を要する幾多の劇變を生ずるものなるを以て、本國との距離接近するに於ては之が處置を施すに極めて便なるべし、更に吾人が亞細亞大陸を以て植民地たらしめんと欲する所以のものは、植民政策に伴ふ軍費の節減にあり、植民政策は軍備の擴張を伴ふものなるは明なり、特に海軍の擴張は止む無きものにして、もし植民政策にして海軍のこれに伴ふ無くんば、其植民地は荒廢に歸し他國の占有する所とならん、シユモラー博士獨逸海軍擴張を論じて曰く「海外貿易のためはた植民地を擴張して吾人が經濟上の安全を計らん爲めには、吾人は必ず强大なる艦隊を之が背後に持たざる可からず」と然り吾人は必ずしも軍國主義を唱ふるものにあらざれども、民族發展の爲に必要なる植民地經營に要する軍備はこれを設けざるべからず、若本邦に於て植民政策を執らんか必然の結果と

亞細亞大帝國建設の基礎

して海軍の擴張を見ざるべからず、而して其植民地が遠隔の地に在りとすれば別に一艦隊を組織するの必要あるを以て其費用は些少にあらざるべし、然るに若其植民地が一葦對水の亞細亞大陸なるに於ては、海軍の擴張は必要なりとするも必ずしもこれが爲に新たに一艦隊を組織するの必要無く、其間幾多經費の節減せられ得べき所あるべく、其他所有軍事的施設に於て莫大の利益あるを信ず、是吾人が特に亞細亞大陸發展を唱道する所以なり、今や亞細亞大陸は世界列强の競爭場裡にして、勝者榮え敗者衰ふるの機運に際す、帝國此間に立ちて韓國の獨立及支那領土保全門戸開放を唱導するは、是即將來に於ける亞細亞大帝國建設の基礎にして、帝國の國是遂行の一階段たればなり。

滿韓の經濟

日露間の媾和は極めて不滿の條件を以て成立したりと雖、滿韓に對する帝國の權利は更に大なるものを加へたるを以て、韓國の經營は更に一歩を進めて自ら內治外交に關する凡ての政權を握り、生命財產の安全を計り、敎育を普及し、移民を奬勵して以て、農業の經營を務めざるべからず、滿洲の經營に至つては政府は如何なる手段方法を執るかを知らずと雖、其植民政策は農業を基礎として百般の經營をなさざるべからず、而して之が實行と同時に本國に於ては植民敎育の普及を計り、且特許を有する植民會社を組織して移民の奬勵をなさざる可らず。

帝國の植民地は亞細亞大陸のみに求む可らず

亞細亞大陸發展の第一著手として、韓國に農業植民を經營し以て大陸經營の策源地たらしめ、更に滿洲の沃野を拓いて人類に貢獻し、西比利亞の平野及我日本民族の手を俟つて始めて開拓の効果を納むべきなり、然ども是即帝國發展の第一若くは第二階段のみ、若し眞に帝國の使命を全うせんと欲せば、宜しく淸國を同化し、更に歩を轉じて南方の米產國に向つて發展せざるべからず、斯くて帝國の植民政策は始めて効を奏するに至るべく、將來に於ける帝國の植民地は亞細亞大陸の他に求むべからず。

世界の外交的活動の舞臺は亞細亞大陸に在り

世人或は南米を以て我帝國發展の地となす、然ども北米合衆國がモンロー主義を保持するを奈何せん、又獨逸の經營を奈何せん、加ふるに距離の極めて遠隔せるは今日我國が未だ彼に及ばず、植民地經營の如き遂に望むべからず、更に世界と外交的活動の舞臺は亞細亞大陸に在り、少くとも廿世紀の活動は亞細亞に於て演ぜらるべし、何ぞ此の如き危急の東亞を棄てゝ遠く南米の地に植民を開くの餘裕あらん、もし餘裕あらば此方面は暫時移民を以て甘ぜざるべからず、然らずして南米其他遠隔の地に植民を

南米の經營は暫時移民を以て甘んず

經營し業敗れ夢醒めて歸るの時は、即東亞の天地は既に他國の蠶食する所となり、帝國の運命又岌々乎として危きに至らん、嗚呼帝國將來の發展地植民地は亞細亞大陸ならざるべからず、隣邦可憐の民族を救濟し、啓發誘導以て人類の責任を全うせしめ、文明の惠に浴せしむるは即我帝國の大使命たらずとせんや。

結論

世界の將來は分裂にあらずして合同にあり

吾人は起たざる可らず吾人は進まざる可らず

小成に安んずる國家滅亡の基

第四章　結論

世界の將來は分裂にあらずして合同にあり、而して列强皆國力平衡を保たんとし、鋭意植民地の獲得に從事しつゝあるを以て、無主無人の荒野茫々たりし昔日に於けるが如く植民地の獲得は容易ならず、幾多の困難と危險とを冒すにあらずんば遂に植民帝國たるを得ざるなり、然ども此の如き困難あるがために渉々たる粟粒の一孤島に閉息するが如きは、即覇氣滿々たる吾人の敢て爲し得ざる所、忍び得ざる所、若退嬰爲すなからんか、我帝國は歴史的地理的國家として單に其形骸を止むるのみに至らん、斯くて三千年來帝國發展の基礎を形成したる我祖先に對して何の面目かある、吾人は起たざるべからず、吾人は進まざるべからず、既に得たる所のものゝみを能く保持し放たざるのみが決して偉大を爲す所以のものにあらず、吾人はそれ以上に尙得ざるべからず、進まざるべからず、一足は進み、一手は握り、更に一足は進み、一手は取り、寸進尺歩孜々として突進し屈せず、撓まず終に偉大なる國家たり國民たるを得べし、小成に安んずるは國家滅亡の基なり、僥倖を萬一に求め勞せずして多くを得んとし、

大器晩成を國是とす可し

一舉して大功を成さんと欲するが如きは、偉大なる帝國の執るべき政策にあらず、速成は其効大なる能はず、大器晩成は即帝國の國是たらざるべからず、故に植民の事業が困難にして其効果が遠き將來にあるの理由を以て、之を非認せんとするが如きは遠大なる思想を有する經世家が執るべきの策にあらず、吾人は唯將來に於ける偉大なる成効を信じて大に移住植民せざるべからず、而して日本民族の子孫を宇内到る處に播布すべし、白雲悠々天地極り無く、天涯地角何れの所か我民族移住の地たらざらん、然ども民族の膨脹は必ずしも國家の發展にあらず、北米合衆國民の三分の一は獨逸人なりと雖、彼等は米國人化して獨逸人の特質を失へるにあらずや、故に吾人は將來民族發展の土地は之を弱國又は下等の種屬に支配せられ、文明の程度低き土地に於てせざるべからず、植民をなすの困難あらば、先移民によるべし、然る後其基礎を形成して之を植民地に變化せしむべし、即植民か、然らざれば將來植民地たらしめ得べき方面に向つて盛に移住せしめよ、亞細亞大陸は此目的地として唯一の發展地たらずや、斯くて小國は大國に併有せられ、國家は益〻廣大を極むるに至るべし、然らば世界の將來は或論者の云ふが如く統一的一大國家たるに至るべしや否や、吾人は世界統一的

民族の膨脹は必ずしも國家の發展にあらず

植民か然らざれば將來植民地たらしめ得き方面に向つて移住す可し

世界の將來

世界統一の方法

國家は到底理想的國家なりと云ふを得ず、若一歩を讓つて世界が統一せらるゝとすれば其方法如何、ラインシュ氏は其方法を分ちて二つとなせり、曰く、聯邦的組織に依ること曰く、一大國家の非常なる勢力を得て他を併呑すること是なりと、而して前者は所謂宗教家が將來の黄金時代を夢みて唱ふる所にして、後者は所謂國家の勢力を以て統一を强ふるものなり、故に吾人は其一を擇ぶの必要あらば、勿論前者を取るものなりと雖、果して世界の統一なるものが實現せられ得べきものなりや否や頗る疑問無き能はず、吾人はラインシュ氏が云へる如く、「世界の一致と共に死的統一(Deadening uniformity)の來らんことを恐る」るものなり、吾人は停滯せる死的統一の國家を作らんよりは、寧多少紛亂あるにもせよ活動的にして生氣滿々たる國家の存在を希望して止まず、然らば將來世界の强國は如何に分合せらるゝものなるか、是亦容易に斷論を下す能はずと雖、幾多學者の說を聞き以て歷史及地理の兩面より推論し來る時は、世界の將來が三分せられて三大帝國の下に平和的文明的人類の生活を見るに至るべきを信ず、而して其三大帝國の一は即亞細亞大帝國にして、之が盟主たるの國は日本帝國ならずんばあらず、天下三分說は即吾人の國家的理想なり、世人或は余を以て一の空

世界の統一は疑問に屬す

死的統一

正氣滿ちたる國家

吾人の國家的理想は天下三分に在り

文明の活動は轉々として窮り無し

支那は亞細亞大帝國の中心たるべくして之が支配者は我日本帝國なるべし

想家となさんも、吾人は決して空想家にあらず、素より此の如き大理想を實現せんには將來幾多の年月を要すべしと雖、此遠大なる理想に向つて進むあらんか、幾代子孫の後には必ず之が實現の日あるを信ず。

文明は轉々としてその活動窮り無く、古代文明の旋風は中央亞細亞の高原に發源し、西亞に過ぎ東歐に吹き西歐を過ぎ更に太西洋を渡りて新大陸北米に來り、今や將に東亞に向はんとし旋風の中心は北米合衆國に於て烈しく旋廻しつゝあり、故に歐洲の舊國は旋風既に去り轉た寂寞の感ありと雖、日本及支那は其前面に立ちて活氣滿々たり、歐洲諸國の活動は將に緩慢ならんとし、日本の進歩急速なるは自然の勢と云ふべし、而して文明活動の推移し來る方向は亞細亞大陸にして、將來支那が大帝國の中心となるべきはまた疑ふ可らず、然らば支那の大活動を支配するの國は即世界に覇たるべきなり、亞細亞大陸は東西兩洋文明が融合同化して更に進歩せる大文明の發現地たるべし、而してこれが支配者は歴史的、地理的關係よりして我日本にあらずして誰ぞ、キツデヰングス曰く、「米國は西歐の凡ての長所を集めて、これを總合し調和するために作られたる國なり」と、然り米國が將來世界人類のために貢献する所誠に偉大なるべきは明なり、然ども吾人は更に云はんと欲す、「我日本帝國は東西兩洋の凡ての長所を集めて、これを總合し調和し新に亞細亞大文明を發揮するために作られたる國なり」と、然り我帝國の使命は茲に在り、而もこれが第一著手としては即韓國及滿洲に農業植民を經營し以て、亞細亞大帝國建設の基礎を形作らざるべからず、亞細亞大帝國の建設は我帝國の自然的必然的運命にしてまた使命たり、この國是の爲に吾人は活動せざるべからず、然ども此の如き大國是は必ずしも今日新に生れたるの國是にあらず、畏くも我　皇祖の御遺勅にも「四海を平定し威八荒に振ふ」と詔らせたるは、帝國主義植民主義を意味するにあらずしてなんぞ。今や開國五十年内漸く整ひ、國力將に外に向つて發展し、この大國是大使命を實現せんとするの秋に際し、亞細亞の地形茫々漠々規模宏大にして測る可らざるものあり、未だ悉く白人種の占有利用に歸せざるは、即神明天の一方に存するありて私に我日本民族に待つ所あるが爲なるべし、茲に於てか我帝國たるもの亞細亞の救濟と復興とを以て自ら任ずるの大抱負と大勇氣とを有せざるべけんや。

亞細亞大文明の發揮者

帝國主義は建國以來の國是なり

四海を平定し威八荒に振ふ

亞細亞の救濟と復興

日清戰役と日露戰爭

嘗て清國と戰ひ今又露國と干戈相見ゆるに至る所以のものは何ぞや、是一に帝國の世

界に於ける一大使命を全くせんとするに他ならず、然ども日清戰役の結果は遼東還附に血涙を注ぎ、臥薪嘗膽十年の久しきに及ぶ、斯くて日露の戰局は如何、五千萬の同胞は再びこれが爲に血涙を振ふ、嗚呼十萬の生靈と十數億の寶貨とは之が爲に捧げられ、連戰連捷の結果は僅に天下志士の血涙を購ひ得たるに過ぎず、國家の發展、民族の膨脹亦難い哉。

鍬鎌を執りて起つの秋は至れり

新興の帝國が幾多戰場の悲慘を敢てし、幾多苦き經驗に遭遇して始めて偉大なるを得たるは古今孰れの國家も皆然り、豈獨り我帝國のみと云はんや、帝國發展の初期に於ける此小挫折によつて國民失望落膽することあらんか、何れの日か帝國の國是を實現するを得ん、不滿の媾和に熱涙を注げるの同胞よ、眞に國を愛せば其涙を拭ひ滿身の勇氣を振ひ奮勵一番鍬、鎌を執つて起て、斯くて不滿の媾和は吾人に滿足の結果を與ふべし、國家は劒に依つてのみ發展するものにあらず、劒は一の手段のみ、眞に國家の發展を期せんと欲せば須らく鍬鎌によらざるべからず、茫々たる滿韓の沃野は吾人が以て發展植民の地となすに餘りあり、徒に故山墳墓の地に戀々たるは日本民族の本懷にあらず、荊棘を開いて新社會を建設し、隣邦數億の民を啓發するは眞に帝國の天

國家は劒に依つてのみ發展するものにあらず

故山墳墓の地に戀々たるは日本民族の本懷にあらず

に受けたる使命なり、然ども此使命や難事中の至難たり、啻に其効果を百年の將來に求め盛に移住し植民すべし、斯くて帝國の雄飛期して待つべく、日本民族の前途は洋洋春海の如し、嗚呼植民政策なる哉、嗚呼植民政策なる哉。

日本植民論　終

明治三十九年四月五日印刷
明治三十九年四月八日發行

日本植民論奥付
正價金八拾錢

校閲者　佐藤昌介
校閲者　新渡戸稲造
著作者　東郷實
發行者　東京市小石川區戸崎町四拾六番地　大橋省吾
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川・金太郎

不許複製

發兌元　文武堂
發賣元　博文館
發賣元　東京
特約大賣捌所　東京市神田區表神保町三番地　東京市日本橋區本町三丁目　東京市神田區表神保町三番地　大阪　盛文館　吉岡平助　名古屋　川瀬代助

10-206

◎最新農業書出版廣告◎

農學博士 佐藤昌介先生 校閲
農學士 佐藤昌先生 新著

農業經濟原論

全壹冊洋裝菊判特製
正價金壹圓貳拾錢
郵送料拾錢

現時の農界に於ける改良策は一にして足らざれども、耕作栽培の方法、肥料品種の撰擇等は、皆之れ末技にして、其根本は實に經濟學上の研究にありとす、然るに農界は徒に技術にのみ馳せ、農業の純收益の多少は、正當なる經濟學的原則によりて支配せらるゝものなるを知らずして、其經濟的關係を輕視するは、眞に今日の通弊なるが如し、元來農業は如何に保守的なるものにせよ、社會の發達、經濟の進歩に伴ひて、其經營の方法を講ぜずんば、安んぞ營利事業として社會に存在するを得べきや、特に本邦は耕地狹少にして、人口夥多、資本亦饒多ならざるものを、若し此儘にして研究する所なくんば、農家は遂に救ふべからざる困厄に陷る事なきを保せず、本書は本邦農界の現狀に鑑み、歐米各大家の學說を參照し、土地、勞力、資本の三要素より、農業の組織及金融に至るまで、遍く詳細に論述し、以て農業經營者の方針を示したるものなれば、農業を以て世に立ち、農事に從を寄するの士は一讀せざるべからざる良書なりとす

27
306

041346-000-7

27-306

日本植民論

東郷　実/著

M39
BDG-0157